研究ノート

李自成台頭以前の明末の華北民衆反乱

吉尾　寛

はじめに

十六世紀後半から十七世紀にかけての所謂明末清初期において、一六二七（明・天啓七）年陝西北部で端を発し、その後二十年足らずの間に華北のほぼ全域に拡大し、一六四四（崇禎十七）年三月十七日明朝の首都北京を陥れて崇禎帝朱由検を自縊においやった反乱、これが本稿のいう「明末の華北民衆反乱」、いわゆる李自成・張献忠の乱の概要である。①

戦後日本の明清期民衆反乱史研究は、抗租・抗糧研究を中心に進められ、②又七〇年代前半白蓮教系宗教反乱研究の意義も見直されるようになったものの、③この明末の華北民衆反乱に対する理解は殆ど深められていない。そしてこの点と関連して、流動的闘争形態をとる集団＝「流賊」が活躍した当該の反乱の研究には、④もう一つ別の問題が存在する。即ち「流賊」については、「人民大衆との結びつきを殆どもたず、各地を掠奪しまわる集団」という毛沢東にさえ見られる認識があり、⑤反乱集団を過少に評価するこうした「流賊」認識に対する検討が未だなされていないのである。

確かに、明末の華北民衆反乱に関する研究は、中国側のそれを中心にして膨大な成果を生んでいる。⑥しかしながら、反乱の全貌を明らかにし、加えて以上のような日本の研究状況を打開するためには、なお解決すべき重要な問題が残されていると思われる。

研究史においては、流賊乃至その代表としての李自成集団のあり方に注目して反乱の史的性格を解明しようとする見方が主流を占めている。⑦こうした見方、いわば流賊論にたつ研究については次の点に留意すべきである。㈠反乱の展開に関して共通した見解がとられている。即ち、一六四〇（崇禎十三）年末からの李自成

の台頭を境として、それ以前の時期（「前期」と仮称する）の展開の特徴は、流賊の盛んな掠奪と軍事的成長にあるとする。一方その後の時期（「後期」と仮称する）の特徴は、李自成が流賊勢力の中から台頭して明朝の都北京を攻略する所にあり、その主な原因は、李自成が、士大夫李巌の参加を得て「免粮」等の政治的スローガンを掲げるようになり、それにもとづいて、一六三九（同十二）年末自然災害の発生によって大量蜂起した河南等の「土賊」・饑民を結集したことにあるとする。これによれば、㈡一流賊たる李自成集団が明朝権力の中枢を倒壊させる中心的役割を担った所に、流賊の活動の積極的意味があると言えよう。㈢流賊の活動の特徴は、前期におけるその顕著な掠奪及び各地の「土賊」・饑民との消極的な結びつきが、後期に入って否定・克服され、それによって、李自成と一六三九年末以降蜂起した「土賊」等との広範な結びつきが可能になったところにあるとされている。しかも、その過程で行なわれる政治的スローガンの提示や自己政権の樹立の中に、反乱の歴史的意義が求められている。このようなとらえ方においては、明末の流賊が、「人民大衆との結びつきを殆どもたず、各地を掠奪しまわる集団」というあり方を有しながらも、それをいかに克服していったのかが重視されている。㈣だが、一六二七―四四年の十八年間の過程の内、その十四年間を占める前期の過程について、流賊が各地の「土賊」等との結びつきを殆どもたず、逆に「土賊」の蜂起も一六三九年末の自然災害の発生を待たなければ活発にならなかったとすれば、当該の反乱は明末の華北地域社会の矛盾と深く関わりをもたないまま展開されたことになる。しかし、王朝の倒壊とは、王朝権力の中枢のみならず、その存立基盤の崩壊――例えば華北各地の地域社会の矛盾やそれに伴う王朝支配の末端機構の崩壊をも意味するはずである。それ故この反乱の展開は、流賊の発生地＝陝西北部の矛盾だけでなく、他の各地の地域社会の矛盾とも少なからず関連をもっていたと考えられる。そしてまた明朝権力の存立基盤は、そうした矛盾から発生した地方的反乱集団の活動、及びそれと流賊との結びつきによって崩れたのではないかと推定される。これらの点から、流賊論においては、反乱の展開と華北地域社会の矛盾との関連、或いは明朝権力の存立基盤の倒壊のあり方が明確には把握されていないと思われる。

主流をなす流賊論とは別に、土賊論と称すべき見方にたつ研究が、比較的最近始められるようになった⑧。それは、一六二七年前後の土賊の動向、及び一六三九年末以降主として李自成の下に結集される土賊のそれを重視することによって、李自成等の勢力の基盤に土賊の活動があると見なすものであり、その土賊のあり方

を通じて反乱の性格規定を行なおうとする研究である。土賊論にたつ研究については次の点に留意すべきである。㈠土賊は、「地方的・土着的集団」[9]と基本的に規定され、地域社会の矛盾に対する何らかの克服の現われととらえられている。又その活動も、一六三九年末の河南の土賊が「明王朝の地方支配をほぼ完全に破壊した」[10]とされ、明朝権力の末端機構を崩したものと見なされている。従って土賊論には、流賊論のもつ不十分な側面、即ち反乱の展開と華北地域社会の矛盾との関連や、明朝の存立基盤の崩壊に関する把握の欠如を補なう性格があると言える。㈡だが、土賊論は展開過程についての理解をほぼ流賊論に負っているため、一六二七年前後と一六三九年末以降の土賊にのみ言及しているだけで、十余年間に及ぶ前期の殆どの過程には土賊の存在すら語られていない。従って、〃李自成等の勢力の基盤に土賊の活動がある〃という土賊論の根拠には、未だ不十分な点がある。

華北民衆反乱が明王朝を滅ぼすにいたる過程には、明朝権力の中枢の倒壊と、その存立基盤の倒壊という二つの面があったと考えられる。そして以上の研究史の総括から、このような倒壊は、流賊の活動、土賊の活動、並びに両者の結びつきによるものと見なされる。しかし問題なのは、こうした見方が反乱の展開過程に対する十分な理解に未だ裏打ちされていないことである。即ち、流賊論の立場にたつ人々は、「流賊」認識を前提とし、十四年間にわたる前期過程について、流賊は各地で掠奪に専心したため、彼らと各地の土賊・饑民との間には、対立こそあれ、志向を共有する結びつきはなかったとし、又土賊の蜂起自体も、一六三九年末以前では不活発であったとする。そして土賊論もこの見解に従っている。つまり、前期過程に関するこのような理解が、前述したように、当該の反乱が各地の地域社会の矛盾に根ざして発現し、明朝をその存立基盤から倒壊させるという過程を不明確にしていると思う。

だが、流賊論・土賊論に共通する従来のこの理解は果たして正しいのか。流賊論にたつ一人J・B・パーソンズは、前期の流賊と一般の民衆・土着の反乱集団との結びつきについて分析した唯一の研究者であるが、彼の結論は極めて消極的である。即ちパーソンズは、前期の流賊の掠奪を強調するとともに、流賊と一般の民衆等との結合は、互いの利害の一致が認められた僅かな場合におきるだけで、おきたとしても一時的なものであり、それ故前期の流賊は一般の民衆等から継続的な支持を得ることができなかったと総括した。[11]だがこの結論は、両者の結びつきに関する十数の事例をひとまとめにして導き出されたもので、反乱の具体的過程に即して考えられたものではない。そもそも前期の流賊は華北数

省にわたって反復的な流動的行動をとっていた。[12] つまり流賊は、ある地域には一度ならず到来したわけである。もしその都度民衆が呼応していたとすれば、流賊とその地域の民衆の結びつきは緊密なものと考えられねばならず、さらには呼応がひき続く中で、民衆独自の蜂起も一つの可能性として想起される。パーソンズの見解はこうした点に全く言及しておらず、従って、前期の流賊と一般の民衆・土着の反乱集団との結びつきについては、未解決な点が多く残されている。

明末の華北民衆反乱の一大特徴は、それが明王朝を倒壊した所にある。しかし以上の点から、その倒壊のあり方は、前期の反乱の展開過程の把握――とくに流賊と土賊・「饑民[13]」との結びつき、及び土賊の蜂起の実態を明らかにすることによって、より的確にとらえられねばならないと言えよう。そしてまた、このような作業を通して、従来の見解の前提となっている「流賊」認識の再検討等、当該の反乱の史的性格をさぐる上で解決すべき点を、今一度はっきりさせる必要があると思われる。

本稿はこうした問題関心をふまえて、一六四〇（崇禎十三）年末以前＝李自成台頭以前における反乱の展開過程の把握を試みる。ただしその際、一六三九（同十二）年末に河南の土賊が大量蜂起した原因をとらえなおすことに重点をおきたい。この事件は、李自成が一六四〇年末以降この時の土賊を結集して自らの台頭を実現した所から、明朝の倒壊を決定づけた重要な事件と見なされる。にもかかわらず、事件発生の原因は、前期に対する従来の見方――土賊の活動が殆どなかったとする見方にもとづいて、それまでの反乱の展開とは無関係な自然災害の発生という極めて偶発的なものに帰されている。だが既に述べたとおり、前期を通じて土賊の活動が全般的に不活発であったかどうかの検証は殆ど示されていない。故に、この事件発生の原因を、一六三九年末以前の土賊の活動状況との関連においてとらえなおす必要があると思われる。

具体的には次の三つの作業を行なう。㈠官軍との抗争を中心にして、前期の流賊の活動を明らかにし、それにもとづいて、一六三九年末の河南の土賊の大量蜂起という事件が、流賊の活動にとっていかなる意味をもっていたのか明らかにする。㈡事件発生の原因を考えるについては、それまでの土賊の活動状況を具体化するために、先ず、流賊の行動に即して、華北諸地域における流賊と土賊・一般民衆[14]との結びつきを網羅的に明らかにする。㈢同様の意図から、㈡の結合が流賊の去った後いかなる経過を辿るのか極力明らかにする。つまり上記の諸点を通して、李自成台頭以前における反乱の展開過程の特徴を新たにひきだすことにしたい。

本文及び註・「別表」において、清・呉殳『懐陵流寇始終録』は、『懐』、清・呉偉業『綏寇紀略』は、『綏』、清・管葛山人『平寇志』は、『平』、纂修明史翰林院検討王楫編輯『崇禎長編』は、『崇』、台湾中央研究院歴史語言研究所『明清史料』は、『明』と各々略記する。なお資料の間に史実の異同がある場合には、資料を相互に検討し信頼しうるものを使用した。

① 従来この反乱は、「明末の農民反乱」として問題にされてきた。だが筆者は、反乱の担い手が農民以外の者――例えば都市の下層生活者にも及ぶと考えるので、今後複数の階層からなる民衆の反乱として問題にする。

② 田中正俊「起ちあがる農民たち―十五世紀における中国の農民反乱―」(民科歴史部会著『世界歴史講座』二、一九五六年、三一書房、所収)、同「民変・抗租奴変」(『世界の歴史』一一・ゆらぐ中華帝国、一九六一年、筑摩書房、所収)、横山英「中国における農民運動の一形態―太平天国以前の『抗糧』運動について―」(広島大学文学部紀要、七)等。

③ 小林一美「抗糧・抗租闘争の彼方―下層生活者の想いと政治的・宗教的自立の途―」(思想、第五八四号)、相田洋「白蓮教の成立とその展開―中国民衆の変革思想の形成―」(青年中国研究者会議編『中国民衆反乱の世界』、一九七四年、汲古書院、所収)等。

④ 『明史』はこの反乱の指導者たちに関し、巻三百九に「流賊伝」を立てている。

⑤ 例えば毛沢東は、一九二九年「党内のあやまった思想の是正について」という決議文を書き、その中で「流賊的思想」を「あやまった思想」の一つとして規定している。次の文章は、「流賊的思想」の定義の一節である。「三、大衆といっしょに困難なたたかいをする辛抱づよさがなく、大きな都市にいって大いに食ったり飲んだりすることばかり考えている。」(『毛沢東選集』第一巻、外文出版社)

⑥ 山根幸夫編『中国農民起義文献目録』(一九七六年、東京女子大学東洋史研究室)、参照。

⑦ 本稿における流賊とは、史料中「流賊」・「流寇」と記されて、陝西北部を主な発生地にもち、一六三一(崇禎四)年の「三十六営」成立(後述)を起点として華北数省に流動的な闘争を展開した集団を意味する。流賊や李自成集団に着目する研究には、以下のものがある。清水泰次「明代の流民と流賊」(史学雑誌、第四六編二・三号)。田坂興道「李自成は回教徒か」(東方学報東京、第一二冊)。同『中国における回教の伝来とその弘通』下巻第四章第三節第四項「回教徒流賊の発生」(一九六四年、東洋文庫)。古林森広「明末の農民反乱―李自成集団とその展開―」(兵庫県社会科研究会会誌、第三号)。同「明末の農民反乱と読書人層―とくに李自成集団を中心にして―」(兵庫県歴史学会会誌、第二号)。田中正俊「民変・抗租奴変」(『世界の歴史』一一・ゆらぐ中華帝国、一九六一年、筑摩書房、所収)。鈴木中正『中国史における革命と宗教』第八章「李自成・張献忠の反乱」(一九七四年、東京大学出版会)。李文治『晚明民変』(一九四八年、中華書局)。李光壽『明季流寇始末』(一九六五年、中央研究院歴史語言研究所、専刊之五一)。明末農民戦争研究の一連の論稿。James Bunyan Parsons, *Peasant Rebellions of The Late Ming Dynasty*, The University of Arizona Press, 1969. 等。(ただし、本稿の性格上、張献忠の乱・一六四四年以降の反清闘争に限った研究は除いてある。)

⑧ 本稿における土賊とは、史料中「土賊」・「土寇」と記されて、華北諸地域に存在した地方的・土着的集団を意味する。土賊論にたつ研究には以下のものがある。谷口規矩雄「明代の農民反乱」(『世界歴史』一二、一九七一年、岩波書店、所収)。佐藤文俊「『土賊』李青山の乱について―明末華北農民反乱の一形態―」(東洋学報、第五三巻)。同

「明末・衰時中の乱について」（退官記念事業会編『星博士退官記念中国史論集』、一九七七年、所収）。

⑨ 註⑧、谷口規矩雄「明代の農民反乱」前掲。

⑩ 註⑨。

⑪ 註⑦、J. B. Parsons, *Peasant Rebellions of The Late Ming Dynasty*, pp. 216–222.

⑫ 董玉瑛「有関明末農民起義軍流動作戦的一些問題」（李光璧編『明清史論叢』、一九五七年、湖北人民出版社、所収）

⑬ 研究史における饑民とは、ほぼ饑餓農民を意味するが、饑民は本々史料用語であり、しかもその語に対する本格的な内容吟味は未だなされていない（寧ろ「飢えに瀕した民衆」か。註①）。本稿では以下「饑民」と記し、その定義は今後の課題としたい。

⑭ 本稿において、土賊と対をなし或いは流賊と結びつく主体として記される「一般民衆」とは、郷村・都市部にあって未だ集団を組織していない民衆を意味する。

一　流賊の活動

一六二七（天啓七）年、大旱魃の下にあった陝西中部で西安府澄城県の知県が殺害された。数百名にのぼる民衆（「民」）が、災害の下でも厳しく税糧をとりたてる知県を殺したのである。[1] 当時陝西では、農民は過重な付加税の負担に苦しみ、辺境の防備にあたる辺鎮の兵は、兵糧の滞るのに苦しんでいた。[2] それ故この事件は、旱魃が翌一六二八（崇禎元）年にもひき続いた陝西全土に大きな影響を及ぼすことになった。

即ち、北部延安府一帯では農民の打ちこわしや盗賊化の現象が深刻化し、[3] 辺境では兵変が勃発した。[4] 又「豪悍巨族」、片や「亡命」・辺境の兵を各々中核とする土賊・辺賊も、多く「饑民」がつき従う中で一層盛んに活動するようになり、その行動範囲は西安府の諸州県にまで及ぶようになった。[5] さらに南部では「饑民」・土賊、並びに回教徒民の蜂起が発生した。[6] そして一六二九（同二）年に入り、満州族の侵入によって「勤王」軍が京師に召集されると、その逃亡兵が反乱に加わるようになり、又駅遞の削減によって失業した駅卒も次々と蜂起に参加していった。[7] こうして陝西全土は反乱の坩堝と化した。

この間明朝政府は、陝西三辺総督楊鶴らを中心に平定にかかったものの、事態の収拾は容易でなく、掃討から招撫への方針のきりかえも行なわれたが、反乱集団の一時的投降に終わる場合が多かった。

このような状況の下で、一六三〇（同三）年、陝西の反乱勢力の中に山西に移動するものが現われ、とりわけ王嘉胤を指導者にもつ一派は、この移動を通じて一段と勢いを強めた。だがその反面、陝西に留まった諸集団は、新任の総督洪承疇らの官軍の猛攻をこうむって延安・慶陽府の山中に拠るようになり、このため反乱集団の主力は徐々に山西地方にうつっていった。

一六三一（同四）年王嘉胤自身は死んだが、後継者紫金梁はここに「三十六営」二十万の勢力を結集するまでになった。

六月初二日、王嘉胤陽城の南山に在りて、夜飲酔して其下を虐ふ。左右之を殺し、其首を以て献ず。嘉允の偽署右丞白玉柱降るも、左丞紫金梁復た衆を糾め、兵三十六営を起こし、二十万と号す。（『綏』巻一）

この「三十六営」には、その後有力な指導者となる闖王（綽名）高迎祥・八大王（綽名）張献忠・曹操（綽名）羅汝才・闖将（綽名）李自成等が名前を列ねている。従って、主な流賊集団は、一六二七―三一年において形成されたととらえられる。（「別表」参照）

一六三二（同五）年に入り、陝西の反乱勢力が官軍によって潰滅的な打撃をうけたのに対し、山西における「三十六営」の勢力はめざましい活動を見せ、一六三三（同六）年には河北方面にも及んで京師に迫る構えも見せ始めた。そこで明朝政府は、官軍の兵力を整えるとともに、河南・河北・山西の交界における包囲攻撃を敢行し、四月紫金梁が病死したことも相俟って、流賊は次第に河南・山西省境の山中に追いつめられるようになった。こうしてついに「三十六営」の流賊勢力は、一時的な投降によって窮地を逃れることを余儀なくされ、十一月黄河を渡って一気に河南西部を南下した。[8]

流賊は一六三四（同七）年初頭にかけて河南西南部の南陽府・湖北西北部の鄖陽府等を占拠したものの、まもなく各々湖北・四川・陝西方面に進んでいった。だが、湖北西部・四川東部等で官軍・郷勇の反撃をこうむり、そのため主な流賊集団は陝西南部に撤退するようになった。しかも漢中府興安州車箱峡では、陝西巡撫陳奇瑜や洪承疇の官軍の大包囲攻撃をうけ、高迎祥・李自成らは非常な窮地に陥った。[9] そこで、彼らは一転して進路を東にとり、官軍との抗争の中で河南への進入をはかった。かくて一六三四年末には、「七十二営二三十万」の流賊が河南西部に姿を現わした。[10]

一六三五（同八）年一月、河南東部に到った流賊は、官軍の河南全土にわたる包囲攻撃のあることを察知し、高迎祥ら「十三家」の指導者を中心に開封府滎陽県で、戦略会議――「滎陽大会」を開いた。[11]

賊、……七十二営の頭目老獪獪・闖王・革里眼・左金王・曹操・改世王・射塌天・八大王・横天王・混十万・過天星・九条龍・順天王等十三家を合し、滎陽に会して官軍を逆拒がんことを議す。（『綏』巻二）

彼らはそこで、各集団の攻戦経路及び戦利品の平等分配を決議し、その上で河南一帯に進んでいった。しかも次の史料に見られ

るように、当時の流賊は、正面からの官軍との戦いをもはや避けず、大きな城市に対する攻略にも積極的にのりだしたのであった。

蓋し七年〔＝崇禎七年〕以後の寇、復た（もはや）兵を避けず。名都・広郡、諸将の分駐する所の者、賊偏に之が為に走集し、以て其憑陵の害〔＝勢いを盛んにして相手をしのぎ打撃を与えること〕を肆にす。（『綏』巻二）

流賊は、後にも述べるように、殊に河南東部から長江以北の安徽地方にかけて、官軍の駐屯する多くの城市を打ち破った。ここに、前期における流賊の活動は「最盛期」をむかえる。

四月安徽の有力集団が一挙に陝西に進むと、明朝中央はこれに対して、総督洪承疇らに命じて陝西での反撃を促すとともに、総理盧象昇に命じて江北・河南・山東・四川・湖広の官軍を統轄的に指揮させるようにした。このため陝西における流賊と官軍の戦いは一層激化した。そこで高迎祥・張献忠らの有力集団は再び河南に進むようになり、一六三五年末には河南東部・安徽地方に入っていった。しかも翌一六三六（同九）年一月、盧象昇らの官軍との抗争の中で、彼らは又も西方に移動を開始し、河南・湖北省境地域から湖北西北部に進んだ。かくて流賊は、安徽→陝西→安徽→湖北と、大規模かつ反復的な流動的作戦を展開したのである。そして一六三六年七月再度陝西（南部）に及ぶと、当時陝西に留まっていた李自成らとともに、流賊は益々その勢いを強めたのである。

だが正にこの時、最も有力な指導者高迎祥が陝西巡撫孫伝庭によって殺害された。[12] この事件を境に流賊勢力は大きく二派に分かれ、李自成らは陝西・甘粛方面に、張献忠らは陝西・湖北省境から一気に湖北・安徽方面に進んでいく。そしてこれに端を発して、流賊の活動は新たな段階に入る。

一六三七（同十）年、明朝中央の姿勢に変化がおきた。前兵部右待郎楊嗣昌が郷里から北京によびもどされると、彼は華北全土における流賊への包囲作戦を計画し、それとともに広東で海賊を平定した熊文燦を総理に推薦した。[13] これまで中央政府は、流賊に対して主に掃討作戦をとってきたが、この熊文燦は自らの経験から独り招撫の方針をとることにしたのである。[14] この年流賊は、陝西・四川と湖北・安徽の二方面に分かれ、さらに後者の諸集団は官軍に撃退されて、湖北北部に分散するようになった。こうした状況の下で、熊文燦の考えは決して的外れなものとはいえなかった。流賊は、この後「投降と分裂」の危機に直面するようになる。

一六三八（同十一）年一月、三一年以来の指導者闖塌天（綽名）劉国能が先ず投降した。[15] 四月「張献忠、陳洪範に降り、穀城に拠る。[16]」とあるように、ひきつづき、有力集団の一つ張献忠らも湖

北襄陽府穀城県で投降にふみきった。これら主だった集団の投降は勢力全体の弱体化につながり、湖北の流賊は次々と官軍に破られた。こうして十一月、「三十六営」出身の曹操（綽名）羅汝才も数集団を伴って襄陽府均州で投降した。

曹操〔＝操〕羅汝才均州に在り。……其党八営一丈青・小秦王・一条龍・過天星・王国寧・常国安・楊友賢・王光恩を率ゐ、武当山太和宮の太監李継政に降らんことを乞ふを告ぐ。（『懐』巻十一、崇禎十一年十一月）

一方、陝西においても多くの流賊が投降するようになり、[17]その中で李自成は次第に窮地に追いつめられていった。[18]そして十月、西安府潼関原で官軍に大敗すると、ついに自成らは河南西部の河南府にわたる山間地帯に逃げこんだのであった。[19]

このような一連の流賊の投降は一六三九（同十一）年中葉まで続いた。一六三八年以前河南・湖北には二十余の集団があったが、[20]それに較べると、当時活動を続けていた流賊は、その四分の一にしか当らなかったと推定される。[21]（「別表」参照）

しかし、一六三九年五月張献忠が再起し、湖北に投降していた多数の流賊もこれに応ずると、形勢は逆転し始め、官軍の方が屢々破られるようになった。そこで熊文燦は詔令によって即刻逮捕され、楊嗣昌も自らの責任を認めて前線の指揮に赴くことになった。だが、一気に回復したかに見えた流賊勢力の方も、その実投降する集団が跡を絶たなかった。

七・八月改世王（綽名）許可変・安世王（綽名）胡可受らが、[22]十一月には王国寧・常国安らが投降した。[23]この内王国寧らは、一六三八年に均州で降ったことがあり、当時同じく投降していた王光恩・恵登相・楊友賢らとともに、張献忠の再起に応ずることには強く反対の意を示していた。史料には次のようにある。

王光恩奮ひて曰く、丈夫須く自立すべし。献忠反して我之に随へば、是人に下るなり。唯ひ群子能くすれども、我則ち能はずと。衆撫然として善しと称す。衆血を歃らんことを請ふ。光恩遽かに指を齧み血を出して曰く、此歃るに堪へざらんやと。王国寧亦然り。恵登相・常国安・楊友賢皆決し誓ふ。……約して曰く、賊〔＝張献忠〕至れば、痛く之を斫らんと。（『懐』巻十二、崇禎十二年五月）

だが彼らは、一六三九年五月には、結局張献忠に強制されて再起し、前述のように、同年十一月に入って、先ず王国寧・常国安が自らの集団を率いて再投降にふみきった。そして翌年七・九月には、恵登相・王光恩らが四川夔州府で相次いで集団ぐるみ投降した。

過天星〔＝恵登相〕等降るを乞ふ。（楊）嗣昌命じて（左）良

玉に隷はしめ、其党七千は、精鋭を簡びて軍籍に入れ、其老弱を鄖西に置かしむ。（同前巻十三、崇禎十三年七月）

（王）光恩、年二十三、安定の人なり。（楊）光甫〔＝王光恩の部下〕、年三十、鄖陽の人なり。其党多く死傷し、現存する者三千、皆寿陽坪に撫に就く。（同前、崇禎十三年九月）

一方張献忠らは、一六四〇（同十三）年に夔州府瑪瑙山で官軍に大敗した後、一旦兵力をたて直し、羅汝才らとともに、[23]楊嗣昌の設けた防衛線を打ち破って四川西部に進んでいった。[24]だが、当時安徽・湖北省境に拠っていた老回回・革里眼・左金王らも、官軍の集中攻撃を前にしてついに投降の意志を示すようになり、[25]こうして一六四〇年末、四川・湖北の主な流賊集団は、官軍の追撃を退けながら進む張献忠・羅汝才の二集団だけになった。（「別表」参照）

正にこの時――流賊勢力の分裂と弱体化のピークにおいて、李自成が河南で勢力を回復した。自成は張献忠の再起以来、集団のたて直しをはかっていたが、度々官軍に阻まれ、一六四〇年九月には四川「巴西魚復山」[27]で兵糧攻めに遭った。そこで彼は、少数の有能な騎兵のみを率き連れて河南に逃げこんだのである。

当時河南は前年末から大旱魃にみまわれ、多くの地域で土賊や「饑民」が蜂起していた。筆者が冒頭で述べた所の、一六三九年末の河南における土賊・「饑民」の大量蜂起である。[28]そして李自成が、十二月に湖北均州から河南西部の南陽府・河南府を北上すると、先ず数万の「饑民」がつき従った。

闖賊〔＝李自成〕均州より伊・洛（陽）に走れば、饑民の従ふ者数万なり。（『平』巻三、崇禎十三年十二月）

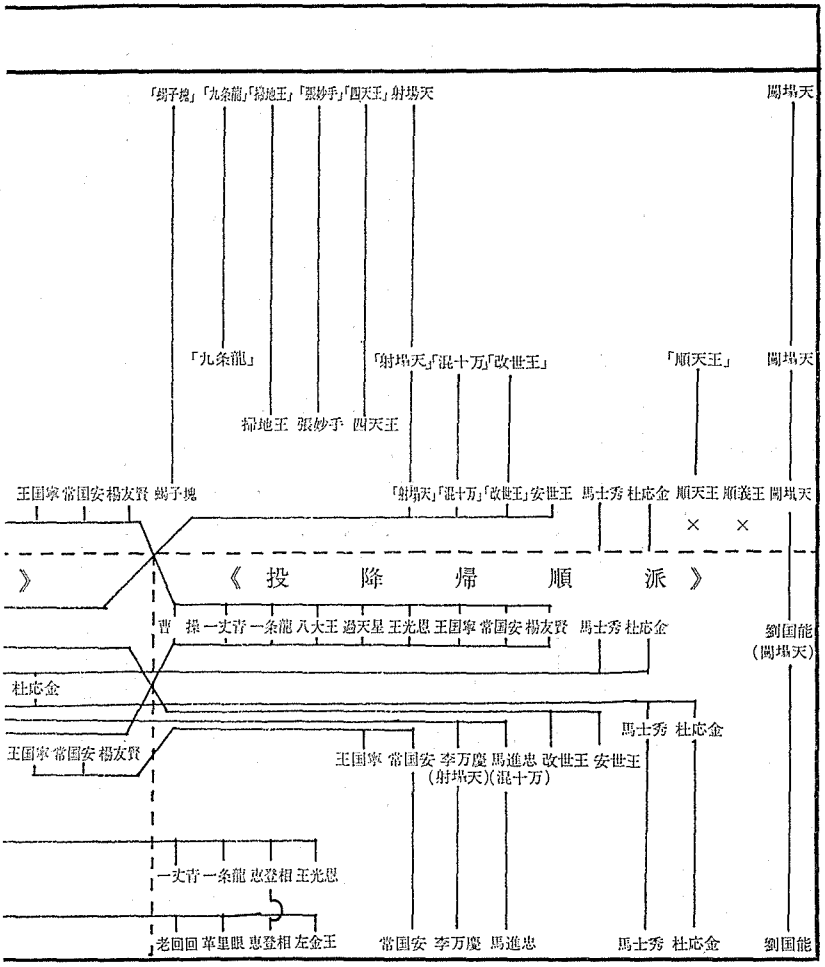
さらに、河南府宜陽県熊耳山における「四十八寨」の堡寨勢力を連破した後、李自成が宜陽県城を陥れた時には、「一斗穀」らの多くの土賊が呼応し、その規模は数十万にふくれあがった。

〔李自成〕四十八寨を連破すれば、土賊一斗穀等の群盗響応し、遂に宜陽を陥れ、衆数十万に至る。（清・谷応泰『明史紀事本末』七十八巻、「李自成之乱」）

李自成はこの月開封府杞県で挙人李巖と出会うのだが、[29]そのことと並んで、以上のような勢力回復が契機となり、一六四一（同十四）年以降の李自成の台頭が実現されていくのである。

ここで、以上の部分で明らかにしてきた前期における流賊の活動を改めて整理しておこう。一六三一年「三十六営」としてその体勢を整えた流賊集団は、一六三五年から三六年にかけて、安徽―陝西の間を大規模に流動し、その中で大いに勢力を振うようになった。だが、一六三八年以後投降がひき続き、そのため流賊勢力に分裂が生じると、一六四〇年末には、ついに張献忠・羅汝才

団の系譜（前期）

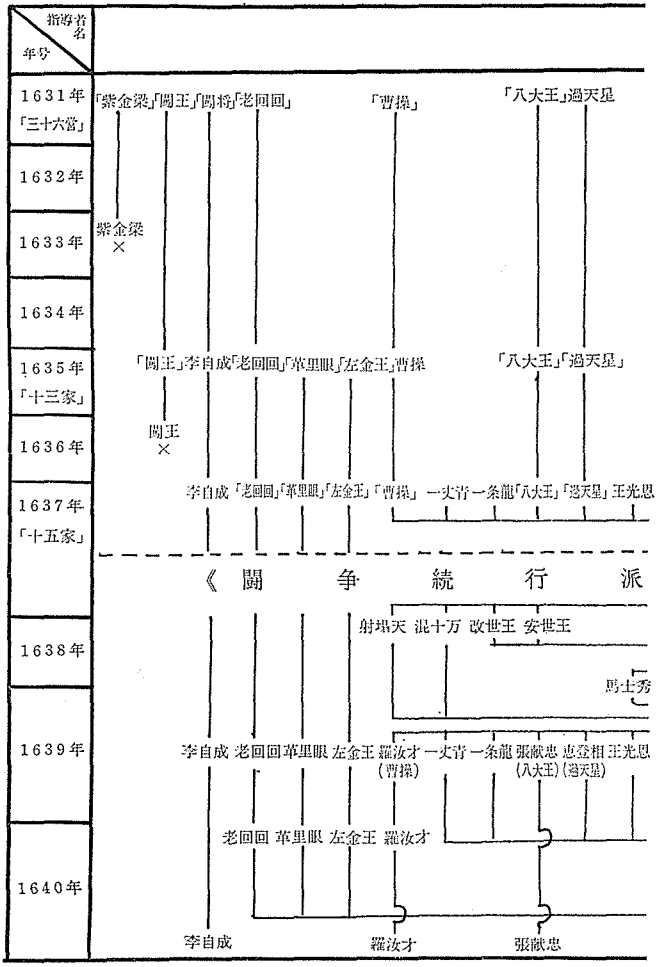


指導者を意味し，"×"は，その死亡を表わす。
十六営」・「十三家」は『綏』巻1・2により，その他は全て『懐』によった。

・李自成の三集団等を余すのみとなった。しかもこの時の投降は、指導者だけでなく、集団ぐるみの場合も多く、流賊勢力は一六四〇年末に至って、四川の集団に見られるように、全体的に弱体化したと考えられる。

こうした状況の下で、一六三九年末河南で多くの土賊・「饑民」が蜂起した。そしてこの内の西部の土賊等は、一六四〇年末に李自成に呼応して彼の勢力回復を支えるようになる。

別表　流賊集



＊「一」は，「三十六営」，或いは「十三家」，或いは「十五家」の集団の指導者のみを記した。又「三十六営」については，主要集団の指導者のみを記した。

しかも先学の示す所によれば、㉞この時蜂起した土賊は、一六四一年以降益々活発化して、次々と李自成の下に結集していく。

つまり我々が注目する一六三九年末の河南の土賊の大量蜂起とは、流賊集団の弱少化という当時の状況の下で、その後の流賊の勢力の回復と拡大を基礎づける新たな反乱勢力の登場を意味していたのである。以下、この事件発生の原因を、それまでの反乱の展開のあり方――特に流賊と土賊・一般民衆との結びつきを起点にして考えていきたい。

① 明・文秉『烈皇小識』巻二に、「是より先、天啓丁卯〔＝天啓七年〕、陝西大旱す。澄城知県張耀采、科を催すこと甚だ酷なり。民其毒に堪へず。王二なる者有り、陰かに数百人を糾し、山上に聚めしむ。皆墨を以て面を塗る。王二高く喝びて曰く、誰か敢へて張知県を殺すかと。衆、声を斉へ応へて曰く、我敢へて殺さんと。此の如き者、三たび。遂に城に闖入せんとす。門を守る者、敢へて禦がざれば、直ちに県に入り、耀采を殺す。衆遂に山中に団聚す。」とある。

② 「反乱の勃発及びその背景・原因については、はじめに註⑦、李文治

・前掲書・一―二六頁による。

③ 清・計六奇『明季北略』巻五・「馬懋才備陳大儀」。

④ 『懐』巻一・崇禎元年十二月、『崇』巻八・崇禎元年四月庚申。

⑤ 『崇』巻三十六・崇禎三年七月壬午。

⑥ 『懐』巻一・崇禎元年十月、『綏』巻九・「通城撃」、『懐』巻一・崇禎元年十一月。

⑦ 『綏』巻一・「澠池渡」、『崇』巻三十一・崇禎三年二月辛亥朔、『懐』巻二・崇禎二年十月。

⑧ 『懐』巻六・崇禎六年十一月。

⑨ 『綏』巻二・「車箱困」。

⑩ 『綏』巻二に、「今冬〔＝崇禎七年〕之賊、由鄖入楚、而所窺在予。……而賊之分為七十二営者、合之将二三十万、蜂屯蟻結于伊・嵩・宛・雒之間。」とある。

⑪ 研究史に言われる「前期の流賊の軍事的成長」を示す具体的な事件である。李文治・前掲書・五七頁、等。

⑫ 『懐』巻九・崇禎九年七月。

⑬ 『明史』巻二百五十二・楊嗣昌伝、同巻二百六十・熊文燦伝。

⑭ 熊文燦の招撫への意志は、『懐』巻十・崇禎十年十一月の条にある湖北黄州府広済県からの彼の上奏文に表われている。

⑮ 『懐』巻十一・崇禎十一年一月。又『懐』巻四・崇禎四年六月の条に、「三十六営」に比定される「二十四家」という流賊の指導者名が挙がっており、その中に闖塌天劉国能の名が見られる。

⑯ 『懐』巻十一・崇禎十一年四月。

⑰ 孫伝庭『孫忠靖公遺集』巻二・「報合水捷功疏」「報三水捷功疏」、巻三・「恭報過賊投降疏」。

⑱ 『明』乙編第九本・兵科抄出陝西三辺総督洪承疇題本。

⑲ 『懐』巻十一・崇禎十一年十月の条に、「(闖)賊〔＝李自成ら〕戦敗、走至潼関原。伏発、亟走欲休息炊食、伏兵又起。如是累日、困甚大乱、自相蹈。……闖賊棄妻女、与劉宗敏等十八騎、逃伏崤・亟山中。」とある。

⑳ 『懐』巻十一・崇禎十一年四月の条に、「先是河南・湖広之賊十有五家。闖塌天劉国能、八大王張献忠、混十万馬進忠、老回回馬光玉、射塌天李万庚、曹操羅汝才、過天星恵登相、革裏眼賀一龍、左金王茵蕤成九家為著名。又有順天王・順義王・順天病死、順義後為劉喜才所殺。更有安世王胡可受・改世王許可変・一丈青・一条龍・王国寧・常国安・楊友賢・王光恩・馬士秀・杜応金等諸賊。」とある。

㉑ 当時熊文燦は「官軍の兵威に恐れる流賊が続々と投降し、残党の消滅も時間の問題だ。」と言っている。『綏』巻六・「撥城変」に、「(熊)文燦疏言、臣兵威震慴、降者接踵。十三家之賊、惟革(里眼)・左(金王)及馬光玉〔＝老回回〕三部未伏。厥率可歳月破也。」とある。

㉒ 『懐』巻十二・崇禎十二年七月、同八月。

㉓ 『懐』巻十二・崇禎十二年十一月の条に、「王国寧・常国安脅于献賊〔＝張献忠ら〕、不忘反正。以千人五百馬再自帰、願従左良玉、得比李万庚。(楊)嗣昌受之。」とある。

㉔ 羅汝才の集団にあっても、内部抗争がおこり、投降する一派が現われている(『懐』巻十三・崇禎十三年七月)。

㉕ 李文治・前掲書・八二頁によれば、当時の張献忠の集団は、兵力の点で官軍にかなわず、その弱点を流動的作戦によって、補っていたと言われている。四川における流賊集団は、その規模においても少数化していたと思われる。

㉖ 『懐』巻十三・崇禎十三年十二月の条に、「湖広・河南・安慶兵大集。(老回)回・革(里眼)等賊懼乞降。監軍員外楊卓然入賊営、定約安置于潛山・霍山・太湖之地。」とある。

㉗ 史料によって位置が異なるが、李文治・前掲・一〇二頁に従った。

㉘ この時の土賊の蜂起については、本文「三」章の最後に史料を示した。詳細は後述。

㉙ 『綏』巻九。

㉚ 李文治・前掲書・一〇二―八頁、谷口規矩雄「明代の農民反乱」前掲。

二　土賊・一般民衆の呼応

従来の研究において、前期の流賊が盛んに掠奪をしたとする根拠の一つは、反乱当初の流賊の実態にある。①だがこの時の掠奪のみを以て、流賊と一般民衆との結びつきが希薄であると結論づけることはできないように思われる。反乱開始後四年を待たずして、両者の結びつきを示す状況が明らかに現われてくる。例えば一六三〇年、陝西の辺鎮では、「飢民」や「飢兵」が到来した反乱集団神一元らを城内に迎え入れている。

延綏の神一元遼陽より逃げ帰り、党三千を糾む。十二月己巳朔、新安辺営を襲ひ破り、兵民を収めて以て寧塞を攻むれば、城中門を開き之を納れ、参将陳三槐を殺す。又柳樹澗堡を攻むれば、亦飢軍・飢民之を納る。（『懐』巻三、崇禎三年十二月）

そして翌年陝西北部の諸州県でも、七月から十一月にかけて、たて続けに城中の民衆が「内応」した。

延綏巡撫張福臻奏すらく、楡林の流賊狂熾なり。……計るに、七月より十一月に至り、其間城を攻め邑を掠すこと、殆ど虚日無し。聞くならく、其禍は皆饑寒に窮苦し、富室を疾視（敵視）し、賊を勾き内より応ずるに由る。（『崇』巻五十四、崇禎四年十二月庚午）

しかもこうした「内応」の事件は、当時山西地方の一部にわたって発生したのである。②

陝西の反乱勢力は一六三〇年から山西に移動するようになり、その後「三十六営」を中心にして当地での活動を展開した。饑饉・過重な付加税等、陝西と同様な問題をかかえていた山西では、③流賊につき従う民衆が日増しに多くなった。

流寇の秦より起こるや、茲に二年なり。河を渡りて晋を犯し、為に禍を受くること三年二月始めなり。……始め晋を寇する者は秦人なり。今晋を寇する者半ば晋人なり。二・三月の間賊に従ふ者十の一にして、六・七月賊に従ふ者十の三なり。今冬に至りて賊に従ふ者十の五六になれり。秦盗掠すも晋民貧しく、晋民貧しくして晋盗生じ、晋盗生じて秦盗益々勝んなり。（清・乾隆元年刊本『平陽府志』巻三十六、芸文元、明王臣直「存恤良民以輯流寇議」）④

又土賊の活動も見られた。一六三二・三年中部の太原府臨県では、流賊が当地の土賊と結んで官軍に抵抗し続け、⑤或いは次の史

料にあるように、一六三二年南部の平陽府西河県では、土賊が流賊を手引きして官軍の反撃を躱させた。

山東道試御史禹好善上言すらく、山西の流寇突かに太行を過ぎり、懐慶の関廂を焚焼し、河内・清化を殺掠す。……方今陽和の兵之を西河の北に截れば、土寇之を導き、東のかた転じて相狂逞す。禍已む時無し。（『崇』巻六十五、崇禎五年十一月甲辰）

一六三三年山西の流賊は河北に入る構えを見せたが、この時も民衆の呼応が積極的な役割を果したと考えられる。次の史料のように、河北との省境にある河南彰徳府林県では、多くの「饑民」が流賊についたため、官軍が大敗を喫したとされている。

賊林県の山中に拠れば、饑民群附し、〔官将〕（左）良玉武安に敗績す。……河南の兵七千、失亡して殆ど尽き、賊益々熾んなり。（『平』巻一、崇禎六年二月）⑥

その後山西の流賊は、一時的投降という苦肉の策を以て黄河を渡ったが、彼らはそこで河南西部の土着の反乱集団や民衆の呼応を得て自らの窮地を脱することになる。即ち、官軍は流賊の南下に対して河南府に防衛線をひいたが、流賊はその地の「礦盗」の手引きを得てそれを突破する。⑦そして、当時の状況を示す次の史料からすれば、この地の「乱民」・「饑民」が盛んに呼応したことによって、流賊はその勢いを回復したととらえられる。

夫向者、賊山に依り険に阻ると雖も、尚大河〔＝黄河〕の南北の界限を為す有り。今既に北よりして南すれば、此より戎馬の足、一望にして阻む無し。加ふるに乱民・饑民相率ひて響応するを以てすれば、其猖獗なること言ふに勝ふべけんや。（『明』乙編第九本、兵部題「流寇侵楚患急等事」残稿）

一六三四年に入り、流賊は湖北・四川・陝西・河南に進んでいったが、官軍の攻勢や郷勇の抵抗をうけ、闘争自体決して有利なものではなかった。しかしこうした情勢の下でも、湖北荊州府の「奸民」・土賊⑧、四川夔州府の「獄囚」⑨等は到来した流賊に呼応し、成功しない場合もあったが、流賊の活動を有利に導こうとするものであった。又陝西南部では、土賊が流賊の到来に乗じて活発化し、逆に流賊もそれに依って闘争を展開しようとした。⑩

以上、流賊が赴いた地域では、規模の大小こそあれ、「饑民」・「乱民」・「奸民」と称される民衆、及び土賊の呼応が発生したのであるが、一六三五年に入ると、こうした流賊への呼応は一層盛んにおこるようになる。即ち、流賊勢力は一六三五年以降、「滎陽大会」の開催による統一的戦略の確立、官軍に対する本格的な攻撃、大都市攻略への着手等、その闘争を一段と活発化させるようになった。このような流賊側の変化に伴って、長江以北の安徽

地方等では、一般民衆・土賊の呼応が以前にも増して盛んにおきるようになったのである。

一六三五年初頭、安徽地方は官軍の警戒下に置かれていたが、流賊が河南東部からその地に進入すると、忽ち鳳陽府の「商・民」がこれに呼応した。当時鳳陽府には、中央から派遣された軍務担当の宦官がおり、その貪欲で残虐的な行為は「商・民」の恨みの的になっていた。彼らはそのことを地方官に訴えたが、地方官はそれを受け入れず、事態は「商・民」の暴動に発展した。ちょうどその時流賊が到り、そこで彼らは流賊を鳳陽府に迎え入れたのである。[11] しかも李自成・張献忠らは、これをきっかけに鳳陽府の皇陵を焼き払い、死者四千余人にのぼるこの事件は明朝政府を震憾させた。[12]

その後高迎祥・李自成らは河南に進んだものの、張献忠らの諸集団は安徽に留まり、城市の民衆の呼応もひき続き発生した。一月廬州府無為州では、流賊の到来に際して、州城の「饑民」が騒ぎをおこし、それにより流賊は城市を陥れた。

賊黄梅より無為州に至る。饑民洶洶として、城守るべからず、遂に破る。（『懐』巻八、崇禎八年一月）

二月安慶府宿松県では、「賊宿松に至れば、官逃げ民迎ふ。賊仍殺掠す。」とあるように、役人が逃げたのに対し、民衆は流賊を迎えた。又鳳陽府太和県では、「姦民」が流賊と結びつき、抵抗する知県を殺すという事件がおきた。

太和城無し。丙戌賊至り、知県金元始滌に拠りて以て守る。姦民賊と通じ、元始傷つけられ自殺す。（同前、崇禎八年二月）

そして四月、湖北に入った流賊が黄州府黄陂県・徳安府孝感県を包囲すると、「叛民」が迎えて黄州府蘄州への手引きをした。

賊黄陂・孝感を囲めば、叛民之を迎へ蘄州に入らしむ。（同前、崇禎八年四月）

この他成果を生まなかった場合も含めると、流賊と当地の民衆の結びつきは随所に見られる。例えば安慶府太湖県の場合、流賊が「鉄工」と結びついて「内応」を謀ろうとした。[13] 又次の史料にあるように、二月廬州府では、流賊と結びついた複数の者が知府によって殺されている。

賊廬州を攻む。知府呉太樸賊に通ずる者金国光等を斬り、首を城下に擲つ。（同前、崇禎八年二月）

さらに同舒城県にあっては、五六十人の者が流賊と通じ、その「細作」[14]となっていたと言われている。

豈知らんや。江北の州県に若干の流賊と通同せる的有り。舒城県の如きは、五六十を捜し尋ね出し来たり、尽く皆梟す。流賊、

細作の殺さるるを見、風を望み遁げ去る。（明・陳龍正『幾亭全書』巻二十四、政書「同善会講話」、乙亥〔＝崇禎八年〕夏第十四会講）

一方、こうした城市を中心とする呼応とは別に、土賊の流賊に対する呼応も盛んにおきた。流賊が安徽に入る前にも、既に河南東部の汝寧・開封府では土賊の呼応が見られる。

乙卯、賊上蔡・郾城を攻む。又土賊万余人有り、帰村・徐寨・互店を掠し、前賊と応ず。（『懐』巻八、崇禎八年二月）

そして安徽地方では、一月戴安鎮（位置不明）の土賊が流賊を導いて滁州等を攻撃した。

戴安鎮の土寇、流賊を導き全椏・滁州・和州を囲む。（同前）

又鳳陽府から廬州府にかけての山間地帯では、「乱民」と並んで、土賊が到る所で流賊の進路を手引きしたと言われている。

御史范復粋奏すらく、前者賊十三営なりしも、今乃ち七十二営に至る。……今賊已に鳳陽を過ぎ、廬州に至り、山箐・大谷あらば、虎の蜦を負ふが如し。而も地方の乱民・土寇、到る処賊の為に嚮導し、無人の境を入るが如し。（同前、崇禎八年四月）

しかも土賊の活動は、翌一六三六年に多数の流賊が河南・湖北省境地域に到った際さらにはっきりと現われる。一月河南方面から流賊が侵入すると、湖北襄陽府襄陽県の土賊は彼らを歓迎して、ついには合流したと言われている。史料には次のようにある。

河南の賊、桐柏・泌陽より襄陽の湖陂の黒山に屯す。土賊廖三・袁世儒・李玉石、牛酒を以て之を迎へ、楽を張べ会を高んにし、遂に賊営に入る。（『懐』巻九、崇禎九年一月）

この地の土賊は長年の活動基盤をもち、相当の勢力を保持していたと見られるが[15]、三月以降、多くの流賊が安徽・河南地方から続々と到来すると、襄陽府下の土賊は同様に合流し[16]、又次の史料にあるように、官軍の攻撃の下で有利に流賊を手引きしたのであった。

均州・宜城・殺城・上津・環山皆賊なり。……〔官将〕秦翼明歩卒を以て賊を南漳に逐ひ、深く山中に入る。転戦すること浹旬、一として太だしくは創ふ能はず。均州の土寇嚮導を為し、武当の太和宮を焚き、襄陽に会す。楚撫王夢尹制す能はず。（『綏』巻四）

このように一六三五年から三六年中葉にかけて、長江以北の安徽、河南・湖北省境地域等では、一段と勢いを強めた流賊集団に呼応する「饑民」・「姦民」・「乱民」、及び土賊の活動が集中的に見出される。従来の研究では、この時期は「前期における反乱の最盛期」と規定され、それは主に流賊の統一的戦略の確立を以て

特徴づけられてきた。確かに、流賊集団の活発化が「饑民」・土賊等の呼応を一層激発させたと言えよう。だが、呼応した側が城中からの呼応や進路の手引き等を行なって、流賊の活動――大都市への攻撃、官軍との本格的な交戦を成功裡に導いていたことも事実である。寧ろ筆者は、「最盛期」と呼ぶべき状況が流賊自体の活動とともに、流賊に呼応する各地域の「饑民」・土賊等の活動にもとづいて醸成されたと考える。

流賊勢力は、その後一六三七年から徐々に官軍に退けられるようになり、三八年以後投降する者も相次いだ。しかし、そうした劣勢の下でも、流賊への呼応はいくつかの地域で依然おきていた。例えば、一六三七年李自成らが陝西から四川に入った時、成都府付近の土賊は多数自成につき従い[17]、それと同時に陝西南部においても、残留した流賊が土賊と密接に結びつきながら活動を展開した。次の史料は当時の陝西南部の状況を示したものである。

漢南の大寇に至りては、川中に遁げ入ると雖も、遺孽尚多く、土寇と相倚り崇ぶを為す。略陽・階州・城固・洵陽・白河の間の如きは、或いは千百と報じ、甚だしくは或いは万余と報ず。

（孫伝庭『孫忠靖公遺集』巻一、「移鎮商雒派防汎地疏」）

又一六四〇年の初め湖北・安徽省境地域では、老回回・革里眼・左金王らの流賊が盛んに「土人」[18]に金銭を施した。そこで「土人」のうちの「星卜」[19]・「市販」[20]が「間諜」[21]となって、官軍の規模や戦術等を尽く流賊に伝えるようになったと言われている。

壬戌、左金王・革里眼・南営八大王・老回回・揺天動、兵を合はせ蘄州何家舗に屯す。……回・革善く土人を購ひ間諜と為す。星卜・市販の流多く用ひらる。官兵多ければ則ち竄げ伏し、少なければ則ち敵を迎ふ。山を捜し野を清むれば、則ち突かに郊関に出で、陣を平原に列ぶるに及びては、又険を負ひ箐に深す（かくる）。賊、主と為り、兵反って客と為り、是を以て多く敗る。（『懐』巻十三、崇禎十三年一月）[22]

以上、流賊がまとまって活動した地域を順に追いながら、そこにおける呼応の事件を後づけてみた。その結果、時間的には一六三〇年から三六年までを中心とし、地域的には陝西北部、山西中・南部、河南西部、長江以北の安徽、湖北西北部等、多数の流賊が赴いた殆どの地域で、流賊への呼応が盛んに行なわれたことが認められた。これらの呼応の主体は、各地域の土賊をはじめとし、「饑民」・「茲民」・「乱民」等と称される民衆であり、彼らは流賊の進路の手引き、城中からの「内応」、流賊集団への参加、「奸細」としての活動等、流賊が官軍と戦ったり城市を攻撃する際に、重要な役割を果たしていた。殊に一六三五年から三六年中葉において、流賊が大都市への攻撃を開始し、又官軍と真向から戦うよう

になると、こうした土賊・一般民衆の呼応も一段と活発化し、両者の緊密な結びつきを通して「前期の反乱の最盛期」と呼ぶべき状況が醸成された。即ち、前期における土賊・一般民衆の流賊への呼応は、流賊の軍事的成長と並ぶ、前期の反乱の展開を推し進める重要な要因であったのである。

ただし、こうした呼応が一回限りの流賊への呼応に留まり、又その後何ら進展を遂げなければ、反乱の展開に真に積極的な役割を果たしたとは言い難い。そこで次に、この種の呼応が流賊の去った後どのような経過をたどるのか、河南等いくつかの地域を例にとって考えていきたい。

① はじめに註⑦、古林森広「明末の農民反乱」前掲では、反乱当初の李自成集団のあり方にもとづき、一六三八年までのその集団を、ほぼ「各地を掠奪して回り、秩序安寧を乱す点から云ってナラズ者―浮浪人の集団」と特徴づけている。又パーソンズ・前掲書も、一六二七―三一年の流賊の掠奪を指摘し、その上で一六二七―四一年の流賊の闘争目的を掠奪・生存と規定している。

② 例えば『懐』巻四・崇禎四年閏十一月の条に、延安府安定県の「貧民」の「内応」が、『崇』巻五十三・崇禎四年閏十一月丁卯の条に、同府甘泉県の「饑民」の呼応が記されているが、それとともに『懐』巻四・崇禎四年一月の条には、山西太原府河曲県の「饑民」の「内応」が記されている。

③ 『崇』巻四十四・崇禎四年三月丙申の条に、「山西地方では、天啓年間以来屢々饑饉が発生し、その中で官府が絶えず厳しく税糧をとりたてた。そして崇禎年間に入ると、農民の暴動は必至の情勢になった。」（要約）とある。

④ 同様に『崇』巻六十三・崇禎五年九月丁酉の条には、「雲南道御史張宸極上言、秦隴畏剽而東渡、晋民乗乱而響応。平・汾・沢・潞、到処嘯聚、四野既尽、勢及城郭。」とある。

⑤ 『懐』巻五・崇禎五年九月酉の条には、「太原府之臨県、……（神一魁遺党）豹五、与永寧山土賊田福・田科為首尾、官兵不能制。」とある。

⑥ 『明』壬編第三本・兵部題「兵科抄出巡撫呉甡題」稿には、一六三三年七月同じく河北に隣接する遵州直隷州扈和順県において、「流賊の『奸細』〔筆者は、各地域の土着の民衆を主なる出自とし、流賊と結びついた後は、軍情の偵察、『内応』の計画等を担い、流賊の本隊とは別に行動する者、と想定している〕が、預め農民を装い、流賊の到来に際して『内応』をおこした。しかもそうした『奸細』は他の州県に遍くいるという噂がある。」（要約）と記されている。官軍と直接対する場合ではないが、当時山西の流賊が河北との省境地域において、地元の民衆と結びつきながら有利に活動を展開していたことがわかろう。

⑦ 『綏』巻二に、「盧氏〔‖河南府〕崇山造天、牙蹠趾錯。礦盗盤阻、鳴吠相呼。賊因其嚮導、循山間走、直抵内郷〔‖南陽府〕。」とある。

⑧ 『明』乙編第九本・「荆楚勦賊功次残稿」に、「賊知沙津〔‖荆州府〕戒厳、乃循流而上、至葦市〔‖同前〕。潜結奸民尹朝用・譙文迪等内応。而発覚於署印照磨劉継烈、将二奸収斬之。」、「又有奸民鄧鑑者。集奸徒三百、陰□賊通、剋期響応。本道以計梟之、余党解散。……能奉行方略、擒土寇鄧鑑、散其党三百人、而不動声色者、守備龍靖虜也。」とある。

⑨ 『懐』巻七・崇禎七年二月の条に、「賊自大寧・大昌破下関城。壬申、以二十騎至夔州。署印同知何承先在教場散兵糧。賊騎二十馳至城

下、獄囚挙火、城破。」とある。

⑩『懐』巻七・崇禎七年一月の条に、「鄖賊破洵陽、逼興安。分守道王在台固守。西郷土寇乗之、遊擊唐通方擊土寇、而興安賊転破紫陽・平利・白河、（総督洪）承疇馳救之、城得全。」とある。

⑪『懐』巻八・崇禎八年一月。

⑫『綏』巻三・「真寧恨」。

⑬ 清・同治十一年刊本『太湖県志』巻二十三・人物志・武功の条に、「張一寵。……崇禎八年、史可法追賊過太湖。一寵与族弟張顥浜往迎、請建堡。史為之請、得帑銭三万。創建未竣、賊突至、一寵率衆守禦十余日。賊約一鉄工為内応、一寵得其情、設伏。如約、誘而殲之。」とある。

⑭「奸細」と類似した存在であると思われる。註⑥。

⑮『明』辛編第三本・兵部行「兵科抄出湖広巡按余応桂題」には、「当時河南南陽府唐県から湖北襄陽府棗陽県にかけての土賊は、数十年来人のめったに近づかない『亡命』の藪沢を地盤としており、討伐が遅れれば、この土賊は将来必ず流賊に匹敵する勢力になるだろう。」とある。

⑯『懐』巻九・崇禎九年三月の条に、「時登封敗賊逃石陽関、伊・嵩之寇萃于汝州・魯山、向南陽、往来倏忽。均州土寇合流賊、焚武当、侵郎西渡江、掠襄陽・淅川。」とある。

⑰『平』巻三・崇禎十年十月の条に、「川兵擊賊〔＝李自成ら〕於綿州、賊漸逼成都、土寇蘇附。」とある。

⑱ 本文中、次に掲げた史料の中の言葉であるが、「土着の民衆」を意味すると考える。

⑲ 註⑱と同様の言葉であり、「星回りによって占いをする者」と考える。

⑳ 註⑱と同様の言葉であり、「城市（都市）の商人」を意味すると考える。

㉑ 註⑱と同様の言葉であり、「奸細」と類似した存在と考える。註⑥。

㉒『平』巻三・崇禎十二年十月の条にも、老回回等に対する同様の呼応が記されている。ただし次のように、「間諜」となった民衆が「医ト・星相」等に変装したとされている。「回・革多醫麻・黄・新水人為間諜。或為医ト・星相、或緇衣・黄冠、或売械・乞食、分布江皖諸境、以覘虚実。兵多則竄、少則迎敵。官兵搜山清野、則突出郊関、及列陣平原、又負険深箐。賊主我客、相持遥年、流毒四境。」

三　呼応のその後

第一に、呼応があった地域に流賊が再来した場合、その地の民衆がいかに対応したかを見てみよう。一六三五年に呼応が多発した長江以北の安徽地方では、流賊がその年の末から一六三六年一月にかけて再び赴くと、総理盧象昇らの官軍は直ちに彼らを河南に退けた。しかしこの短い間にも、和州では「奸人」が「内応」し、①一六三六年二月には前年呼応がおきた太湖県・宿松県で、「姦民」・「吏・民」が残留した流賊に呼応した。

賊太湖に至る。姦民賊に羊酒を餽り、間に乗じ濠を渡らしめ、城を陥る。知県執はれ屈せず自殺す。賊大いに殺掠す。……太湖の賊宿松を犯す。署県官先に遁げ、吏・民出で迎ふ。村人千余を殺す。（『懐』巻九、崇禎九年二月）

又、一六三四年流賊が「奸民」・土賊と呼応を謀った湖北荊州府

では、翌年一部の流賊が再び到来すると、「敗群亡命之徒」が郷兵を装って彼らを導き入れている。[2] そして、この地を含む湖北・河南・陝西の交界地域では、主な流賊が去った後、「奸民」・「貧民」を主体とする土賊が、流賊の名を借りて盛んに掠奪を行なうようになったと言われている。次の史料は、盧象昇が一六三四・五年鄖陽撫治の時土賊鎮圧のために書いた上奏文である。

照し得たり。督属の鄖・荊・襄・南・漢五府及び興・商二州、畳ねて寇患に遭ひ、生齒・物力、半ば已に彫残す。今大彫の流賊平らぐと雖も、地方の困苦特に甚だし。奸民・貧民、相聚りて鼠窃狗偸と為る者多し。且に多く流賊の名を仮借し、山谷に出没し其盗掠を恣にせんとす。（盧象昇『明大司馬盧公集』巻二、「清伏戎除土寇」）

第二に、呼応発生の後、長期間流賊の到来がなかった地域の状況を見てみたい。山西地方は一六三三年十一月を境にして、その後一六四三（崇禎十六）年にいたるまで、流賊の主たる活動の場ではなくなる。だが、一六三〇―三三年において流賊に呼応した当地の土賊の内、三関（位置不明）の王剛・汾州府孝義県の通天柱・同府臨県の王之臣らはひき続き勢力を保持した。[3] そしてこれら三者は、一六三四年に巡撫呉甡らによって殺害されるまで、中部の太原府等に拠りつつ各々百人から千余人の規模を有し、一般民衆（「良民」）の呼応も得ながら、衙役と結託したり、「店家」を引き込みに使ったりして、盛んに掠奪を行なったのである。[4] しかも彼ら土賊の頭目が死んだ後、その活動は残党節底児・小裁縫らによってひきつがれていった。[5]

又残留した流賊も活発であった。これらは顕道神（綽名）高加討・活地草（綽名）賀宗漢・劉浩然らの流賊を言い、各々数千の規模を以て、南部の汾州府において投降を装いながら凡そ一六三五年まで活動を続けた。[6] しかも次の史料からすると、「饑民」の盗賊化が続く中で、流賊の頭目の死後もその残党の勢いは容易におさまらなかったと考えられる。

天久しく雨ふらず、耕種期を愆り、饑民嗷嗷として、盗と為ること日々衆し。賀宗漢・高加討・劉浩然等の諸渠魁、辛巳に殲除せらると雖も、零賊出没し、尚収拾を費やす。（『疏集』巻十二・「道将用謀制勝殲渠掃窟大獲全捷疏」崇禎八年）

これらの土賊や残留した流賊の勢いが衰えたのは一六三六年に入ってからである。[7] だが、その年に陝西にあった李自成らが山西に侵入する構えを見せ、[8] 又一六三七年には河北順徳府刑台県との省境に新たな反乱集団が発生し、[9] 結局山西の反乱の嵐はやまなかったのである。

長江以北の安徽、湖北西北部、山西中・南部等における呼応の

その後の状況については、次のような特徴が見出される。㈠流賊が再来すると呼応も再発すること。㈡流賊の活動の余韻の中で（cf.流賊の名を借りる）土賊が発生すること。㈢呼応した土賊がその地で独自の活動を展開していくこと、等。

そこで、上記の点をふまえた上で、目を河南に転じ、一六三九年末の土賊の大量蜂起にいたるまでの過程を追ってみたい。この地方は、一六三三年十一月に始めて流賊が赴いて以来、三五・六年には大規模の移動の下で最も頻繁に闘争の舞台となるなど、前期の流賊の活動と深い関わりをもつ地方であった。以下、流賊が黄河を渡って最初に入った地域――河南西部の土賊を中心に見ていくことにする。

一六三三年多数の流賊集団が河南西部を南下すると、「饑民」・「乱民」が呼応して忽ち流賊はその勢力を回復した。そうした中で、南陽府南陽県では、土賊が流賊の到来に乗じて行動を起こした。

何騰蛟、字雲從、湖広の人なり。崇禎六年、南陽県に知たり、善政有り。会ま流賊猖獗し、土寇間に乗じて窃かに発し、郷曲を擄掠す。蛟多方に捕輯し、手ずから賊首李燦を殺す。余皆解散し、境内晏然たり。（清・康熙三十三年刊本『南陽府志』巻四、宦蹟⑩）

その後一六三四年に入り、陝西に集まった流賊勢力が中原に進もうとすると、河南府盧氏県では、土賊が流賊を導いて県城を陥れるという事件が発生した。

辛亥、土賊、流賊を引き、盧氏を陥る。（『懐』巻七、崇禎七年十月）

又一六三五年、流賊が安徽から陝西の間を大規模に流動する中で、十月張献忠らが河南府霊宝県・新安県で陝西の諸集団を迎えようとすると、近隣の土賊は献忠らを導いて再度盧氏県城を攻撃した。

献賊（＝張献忠ら）三大営を霊宝・新安に聯ね、以て陝賊を待つ。己巳、土賊之を引き盧氏を攻む。（同前巻八、崇禎八年十月）

さらに、陝西の高迎祥らの勢力が張献忠らといっしょになって、河南東部に進み始めると、汝寧府にかけて土賊の蜂起が連続した。

高迎祥等新蔡を囲み、舞陽を突く。前隊遂平・確山に向かひ、信陽より東西に分かれて犯さんことを謀る。時に遂平等の県、土賊起つ。（同前、崇禎八年十二月）

即ち、一六三三―三五年の河南西部においては、土賊が度重なる流賊の到来に対してその都度呼応をおこし、流賊の到来に乗じて蜂起をはかるか、或いは流賊の力量に依って自らの活動を有利

に導くかしていたと言えよう。長江以北の安徽・湖北西北部でも呼応の再発は認められたが、当地域における特徴は、その主体が土賊であった所にある。又、特にこの時期の河南西部の土賊は、到来した流賊の力量に依存しながら自らの活動を展開しようとしていたと考えられる。

ところが、一六三六年後半以降、前期の殆ど終わらんとする頃まで、流賊がまとまって河南に入ることはなくなり、それに伴って、当地の土賊と流賊の結びつきも希薄になる。河南西部の土賊の活動はこの後いかなる道程を辿ったのであろうか。

一六三六年、河南巡撫陳必謙は流賊の討伐を行なう一方、当時活動していた土賊の鎮圧にあたっていた。だが、次の史料に見られるように、災害による食料不足のために、土賊の蜂起は後を絶たなかった。

河南の流賊勢ひ衰へ、〔河南巡撫陳〕必謙暇に乗じ諸々の土賊を撃ち平らげんとす。是月且永雹ありて稼を傷つく。土賊復た起つ。（同前巻九、崇禎九年四月）

このような事態をうけて、河南の土賊に対する討伐は次第に強化されていった。『懐』巻九・崇禎九年八月の条によれば、当時河南西南部では、南陽府舞陽県出身の逃亡兵楊四及び張顕明、泌陽県出身の郭三海、裕州出身の張五、魯山県出身の何孟魁、汝寧府遂平県出身の侯馭民・秦至剛らの土賊が山間に盤拠していた。中でも楊四は最強の指導者であり、官府の職務である税糧の徴収や人丁の徴発に類する活動も行なっていた。だが楊四が多くの指導者たちを槎枒山（位置不明）に集めると、知県や地方の官将らは攻勢にで、その結果七月の内に楊四らは次々と投降し、八月に入ると、彼らは投降の証として到来した流賊までも殺害したのであった。ここにいたって河南西南部の土賊は衰退の色を見せ始める。

しかし、巡撫陳必謙が十一月に罷免されると、状況は一転し、次のように土賊は続々と再起した。

泌陽生員樊以屏、兵を集め起義す。土賊の反正せし者、皆之に帰す。陳必謙罷せらるる後、降者復た反し、以屏害に遇ふ。（同前、崇禎九年十一月）

これに伴って官軍も討伐を再開し、土賊楊四らはこの時殺害された。[11]

だが、河南西部の土賊はこれで衰えたわけではなかった。翌一六三七年二月、当時饑饉の下にあった南陽府鄧州では、知州の苛酷な徴税と処罰が行なわれる中で、土賊張三らが流賊を導いてその州城を陥れるという事件がおきた。

初め知州劉振世守る能はざるを慮り、因りて内城を築く。是に

至り歳饑たり、民貧しく、盗と為ること多し。知州孫沢盛催科に厳しく、刑殺甚だ刻なり。土賊張三、流賊〔＝張献忠ら〕を崇引し（招き入れ）、潜かに外城を陥る。……月を踰え内城を陥る。（鄭廉『予変紀略』巻二、崇禎十年二月）

又三月、陳必謙が追論をうけ、その削籍が決定された。河南の土賊が鎮まらないばかりか、流賊に合流するものさえ現われたためであった。[12] これらのことから、河南西部の土賊の活動は依然顕著であったと考えられる。

さらに一六三八年二月、南陽府新野県で次のような事件がおきた。

是時新野県の饑民相聚り、将に乱を為さんとし、衆、県豪張白虎を推し首と為す。知県汾陽の呂開科、其渠魁を撫して、其率はざるを剪れば、一時遂に息む。（同前、崇禎十一年二月）

呂開科、汾陽の人なり。崇禎の間新野県に知たり。時に土寇張白虎乱を作す。開科捕輯し招撫すれば、一時群寇少かに息む。（康熙刊本『南陽府志』巻四、宦蹟）

二つの史料を合わせみるならば、「県豪」を指導者にもち、「饑民」を主力とする土賊がこの時蜂起したことがわかる。しかも「一時群寇少かに息む」とあることから、この土賊は一時活動をやめたものの、忽ち再起して活発化したと考えられる。当時河南西部ではこのようにして土賊の蜂起が断続的に発生したと推察される。[13]

そして『予変紀略』は、巻三・崇禎十二（一六三九）年四月の条に、吏科給事中毛文炳の上奏文を載せ、以下のように当時の河南の反乱勢力の実態を示している。

窃に惟へらく、中州一塊の地、蓋し南北の咽喉にして、天下の腹心なり。……乃ち賊を辨ずる者日一日より延ぶれば、賊勢亦日一日より盛んなり。剿と撫、之効罔ければ、土と流、之並に起つ。臣愚謂へらく、剿・撫原より是一事なり。剿せざれば、未だ能く撫する者有らざるなり。流・土異名を有すと雖も、土為るは誰か其流為らざるを謂はんや。宛賊耽耽として汴を窺ふこと、朝の夕に匪ず、今番真に省会に逼る。正に秋成に当たり、過ぐる所掃くが如く、三農望みを絶たる。既にして中牟・鄭・滎より、意を恣にして殺擄し、復た進みて登・密・嵩・洛の山中に盤る。鞏・偃・郟・禹の諸処、地として蹂躙するに遭はざるなし。……舞・葉・遂・鎮の土賊横行するに至りては、愈集まり愈多く、鞍馬・器械倶に備はる。

当時流賊の多くが投降していたのとは逆に、河南の土賊は流賊にまさるとも劣らない勢力をもっていたことがわかる。例えば、舞陽県等の西南部の土賊は日をおって大勢になり、馬や武器も備

えるようになっていた。一方「宛賊」も、宛県が南陽府南陽県の古名であり、又当時流賊は湖北・陝西にあったことから、南陽県で起った土賊――つまり河南西南部の土賊の一派と考えられる。そしてこの土賊は、自らの地盤をたちきって開封府・中牟県等に移動し、さらに登封県等の河南府の山中に盤拠するようになった。一六三九年中葉、河南西部の土賊の勢いは非常に活発であった。

即ち、河南西部の土賊は、一六三六年後半から三九年中葉にかけて流賊との結びつきが希薄になったものの、前述の山西中・南部の土賊と同様、河南西南部の土賊を中心にして独自に活動を保持し、尚且つその勢力を強めるようになったと見なされる。

正にこうした情勢の下で、一六三九年十二月、河南全土にわたる大旱魃が発生した。これを境に河南各地で土賊が蜂起するようになり、『予変紀略』巻三・崇禎十二年十二月の条はその時のことを以下のように伝えている。

是時大旱蝗あり、川沢皆竭き、滾隍の径に塵揚がる。是より而後、土寇大起すること蝟毛の如し。黄河の南岸、上下千里の中、営頭百余を下らず。其れ倏ち起ち倏ち滅び、或いは将吏に禽斬せられ、或いは其徒に兼併せらる。商邱の黄老山、許州の藍大・藍二、商水の哪咤・二字王の類の如きは、皆著はれず。而れども其尤も大且つ久しき者、西は則ち李際遇・申靖邦・任辰・張鼎有り。南は則ち劉洪起・周家礼・李好・張揚有り。梁宋の間は則ち郭黄臉・張長腿・王彦賓・甯珍・王文煥有り。其東は則ち李振海・房文雨・徐顥環・程有禹・戚念梧等有り。皆衆を擁し以て雄を為し、柵に憑り砦を結び、彼此割拠し、相攻殺す。郡県の従事率ね其耳目と為り、有司敢へて過して(とがめて)焉を詰さず。……其公然と巣穴を離れて剽掠を肆にする者、老当当・一斗穀・宋江・一条龍・衰老山・張判子の属の如きは、之と与せず。

当時黄河以南の河南において、山間に群雄割拠して勢力をはりあい、或いは官衙の属僚を手先に使い、或いは他の土賊と一線を劃して自己の地盤をたちきって行動する、夥しい数の土賊が発生したことがわかる。しかも、官府はそうした属僚を敢えてとりしまらなかったと言われているように、明朝支配の末端機構はこれらの土賊の活動によって空洞化していった。だが我々は、これまで見てきた河南西部の状況とこの史実との間に十分関連性があること、換言すれば、河南西部の土賊が一六三九年中葉以降同年末にかけても活動を続けていたことを読みとることができる。

第一に、史料には、西部、南部、山東との省境地域(「梁宋の間」)及び東部に割拠し、或いは自らの地盤をたちきって行動する「尤も大且つ久しき」土賊の存在が記されている。この点におい

て「尤も大且つ久しき」土賊とは、一六三九年末の時点から見て、最も有力で、且つその時期まで長期間活動してきた土賊と考えられる。従って、こうした土賊は一六三九年末以前から既に活動していたものと見られる。そして、これまで我々は、その「尤も大且つ久しき」土賊の発生地域の一つ――河南西部について、一六三三年末から三九年中葉までの土賊の活動を実際に跡づけてきた。このことからすれば、河南西部の土賊は、一六三九年中葉以降もその闘争を展開し、とりわけ同年末の大旱魃の発生をきっかけに一層勢力を強めるようになり、それによって「尤も大且つ久しき」土賊と称されるまでになったと言える。

第二に、史料には、自己の地盤を離れて行動する土賊の一つとして「一斗穀」の名があがっている。この土賊は、一六三九年二月に東部の帰徳府柘城県にいたと言われているが、[14] 前述のように、翌年末には河南府下で李自成集団に呼応する。[15] 一方、『予変紀略』巻三・崇禎十二年四月の条に記載された吏科給事中毛文柄の上奏文をふりかえると、西部の南陽府に発した土賊が、帰徳府と隣接する東部の開封府にわたって活動を展開し、その後河南府の山中に進んで盤拠するようになったとある。このことからすると、二つの土賊は、行動のし方や活動地域の点で非常に似通ったものととらえられる。「一斗穀」によせて言うならば、それは河南西部に発した土賊であって、一六三九年四月ごろ自らの地盤をたちきって東部の開封府等に進み、その後又西部の河南府に移動して、四〇年末にその地で李自成に呼応したものと推察される。従って、一六三九年中葉以前に河南西部で起った土賊の内には、その後自己の地盤を離れて行動し、同年末の大旱魃の下で一段と有力になった土賊がいたように思われる。

即ち、前期における流賊と土賊の結びつきは、多くの流賊が赴いた殆どの地域で見出されるが、とりわけここ河南西部では、一六三三年末より三九年中葉にかけて、土賊の流賊に対する呼応から土賊独自の活動へと進展が見られた。そして、以上述べたとおり、当地の土賊は、一六三九年中葉以後もひき続き活動を展開し、同年末には大旱魃の発生の下で、河南のほぼ全域に及ぶ土賊の蜂起の一角をになうまでに勢力を強めるようになったのである。

従って、一六三九年末の河南における土賊の大量蜂起の原因は、少なくとも西部の土賊に関するかぎり、自然災害の発生に求められるべきではなく、流賊への呼応を起点としたそれまでの土賊の活動そのものにあったと言わねばならない。

① 『平』巻二・崇禎八年十二月。

② 『明』壬編第二本・兵部題「兵科抄出湖広巡按余応桂題」残稿に、「（六月）初四日、死賊馬歩大隊、分為二支、一支攻沙市、一支攻草

市。……至於沙市、先是荆関抽分工部員外郎石亡岷、団練郷兵、防守厳密。不意有敗群亡命之徒、聚衆従賊、陽為郷兵、陰為賊党導引入市。賊因奪馬上扉、抛磚擲瓦、箭如飛蝗。我兵不能立脚、遂爾奔潰。」とある。なお「敗群亡命之徒」とは、地域の社会秩序の下にある者を害なう命知らずの輩、と解釈した。特に「亡命」‖「命知らず」としたのは、「亡命‖（冒険作悪的人）不顧性命」（中国科学院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典』、一九七七年、商務印書館、一〇五八頁）に拠っている。

③ 李文治・前掲書・三三頁。

④ 呉甡『淮南呉柴菴先生疏集』巻十一・「晋中盗賊情形及勦撫機宜疏」に、「此時〔‖崇禎七年〕山西有三種賊。一曰土賊。其在交城者。煉銀・菴上諸窯、原是良民所居。後為一二黠盗窃拠、遂有化而為盗者。約有千余人、劫掠村鎮、幾無寧日。其在孟県・寿陽・平定諸州県者。山中薬有逼賊、年来結聚漸多、亦約有七八百人。劫奪行旅、禦越人于貨、関不畏死。其余介・武・霍・趙之間、十百為群、鼠窃狗偷、不可勝数。此輩行径、大約衙蠹為之関通、店家為之引線。滋蔓不已、勢将益熾。」とある。なお「店家」とは、「旅店」〔‖遠方から来る商人の宿舎兼売捌き店〕の手代を意味すると考える（寺田隆信『山西商人の研究』、一九七二年、東洋史研究会、二一六・七頁、参照）。呉甡は、一六三一年勅命によって陝西延安府に救済金をもたらし、同年陝西按察使となり、その後一六三四年に山西巡撫となった人物である。『明史』巻二百五十二。

⑤ 『疏集』巻十一・「防河之役未終討賊之挙更急疏」。

⑥ 註④、「晋中盗賊情形及勦撫機宜疏」。

⑦ 『疏集』巻十五・「殲遏散党疏」崇禎九年。

⑧ 『疏集』巻十四・「恭報緊急賊情疏」、同「流賊窺渡甚急官兵極力防堵疏」、同「河防宰可無患善後尤貴早図疏」等。

⑨ 『明』乙編第九本・兵部行「兵科抄出山西巡撫呉甡題」稿、同兵部題行「兵科抄出保定巡撫張其平題」稿。

⑩ 明・鄭廉『予変紀略』巻二によれば、土賊李燦の乱は崇禎六年末とされている。

⑪ 官軍の動向と合致する史料は見あたらないが、『懐』巻九・崇禎九年十二月の条に、「総理王家禎家丁三百人大譟。燒汴梁西門、掠黒尾営、殺五十余人。家禎登城慰賞之、令往南陽、剿土寇楊四、始定。」とある。

⑫ 『懐』巻十・崇禎十年三月の条の「癸亥、河南巡撫右僉都御史陳必謙削籍」について、同巻九・崇禎九年十一月の条に、「至是巡按楊繩武、……劾（陳）必謙軽撫、罷官、（総理）王家禎代。又以土寇未尽、更投流賊、兵部追論必謙削籍。」とある。

⑬ 又一六三八年二月には、同府舞陽・葉県で――「土賊」とは称されていないが――、宗教反乱と考えられる「妖民」の乱が発生している。『予変紀略』巻二・崇禎十一年二月の条に、「舞・葉間、妖民劉保児作乱、知県李蕃長平之。時方旱蝗、民多失業、兼以流賊往来、人益揺揺無固志。劉保児居舞・葉之間、乗機作乱。其所煽惑者甚衆、盤拠泚山西北一帯、萃為淵藪。……」とある。

⑭ 「庚辰、土賊一斗穀犯柘城西関、遂襲城、不克而走。」（『予変紀略』巻三・崇禎十二年二月）

⑮ 本文「一」章の最後に引用した史料を参照されたい。

結びにかえて

李自成台頭以前における反乱の展開過程には次のような特徴があった。

反乱発生の後、流賊勢力が華北数省にわたって活動を展開する中で、時間的には一六三〇（崇禎三）年から三六（同九）年を中心として、地域的には陝西北部、山西中・南部、河南西部、長江以北の安徽、湖北西北部等において、流賊に対する土賊、並びに「饑民」・「姦民」・「乱民」等と称される民衆の呼応が多数発生した。ことに一六三五（同八）年から三六年中葉、流賊が大都市への攻撃を開始し、官軍とも真向から戦うようになると、これに応じて土賊・一般民衆も、流賊の進路の手引き・城中からの「内応」等を一層盛んに行ない、両者の緊密な結びつきの中から、「前期の反乱の最盛期」と呼ぶべき状況が醸成された。だが流賊勢力は、当初「三十六営」という多数の集団を有していたものの、一六三八（同十一）年以来投降による分裂が生じて、四〇年末には張献忠・羅汝才・李自成等の集団を余すのみとなった。これに対し、呼応した土賊の方は、山西中・南部や河南西部の状況によるならば、呼応の後独自に活動をくりひろげていった。敢えてくりかえすが、特に河南西部の土賊の場合には、一六三九（同十二）年末の大旱魃の発生を契機に一段と勢力を強め、河南のほぼ全域にわたる土賊の蜂起の一角をになうまでになった。一六三九年末における河南の土賊の大量蜂起の原因は、それまでの前期の土賊の活動――流賊への呼応を起点とした河南の土賊の活動そのものにあったと言えるのである。そしてこの事件は、当時弱少化しつつあった流賊にとって、その後の彼らの勢力回復と拡大を可能にする新たな反乱勢力の登場を意味したのであり、事実李自成は、一六四〇年末以降、この時蜂起した土賊を結集することによって自らの台頭の一礎となし、後期において明朝打倒への道を大きく開くのであった。

従来の研究は、一六四〇年末以後の反乱の飛躍的展開――即ち流賊＝李自成集団と河南等の土賊・「饑民」の蜂起を基盤とする展開過程を重要視してきた。筆者もこの点を否定するものではない。だが、本稿で検討してきた反乱前期の諸特徴からすれば、そうした「飛躍」も前期の過程なくしては起こりえなかったことになる。つまり、李自成の台頭は、実に前期の反乱の展開過程を通して生まれでた、河南西部等の土賊の活動によって基礎づけられたものであったのである。① そして河南に典型的に見られるように、明末の華北民衆反乱には、当初より一貫して（一六二七―四四年）、華北のほぼ全域に及ぶ流賊の活動と、各地の土賊・一般民衆の活動とからなる、いわば二重の構造があったと見なければならない。即ち、このような二重の構造をもとにして、片や流賊李自成らを中心に明朝の都北京が陥れられ、片や華北各地における夥しい数の土賊によって、明朝支配の末端機構が、一六三九年末の河南全

土の場合と同様尽く破壊されたと考えられる。

筆者は、以上のような明末の華北民衆反乱における「流賊―土賊・一般民衆」の二重構造に着目してこそ、この反乱が明朝を滅ぼすにいたった過程――明朝権力の中枢とともに、その存立基盤をも崩壊させるにいたった過程が明らかになると思う。

では、この明末の華北民衆反乱とは、いかなる民衆の課題をになったものであろうか。このことは当該の研究の究極的な問題であるが、本稿では直接触れるまでにはいたらなかった。ただし、前期の反乱の展開過程を把握する中で、その問題を解くためにはどのような作業が必要なのか確認することができたように思われる。最後にこの点について言及し、しめくくりとしたい。

第一。流賊は掠奪を行なう一方、華北諸地域の民衆と確かな結びつきをもっていた。従って、「人民大衆との結びつきを殆ども。たず、専ら各地を掠奪しまわる集団」という既成の「流賊」認識、並びにこの認識を前提とした従来の反乱の性格規定には大きな問題があると言えよう。我々は、少なくとも明末の流賊のあり方そのものを再検討する必要があるのであり、とりわけ、「流賊」認識によって強く規定されてきた前期の流賊について、その実態を見極め、闘争形態をはじめとし構成員の意識・志向性にまで及ぶトータルな把握をなす必要がある。

第二。土賊は、華北諸地域に共通して見出される反乱集団であり、又その活動は長期にわたるものであった。こうした状況は我々に、当該の反乱が流賊の主たる発生地＝陝西北部の矛盾だけでなく、華北各地の地域社会の矛盾に根ざした反乱であることをはっきりと認識させる。従って、土賊の蜂起の所以をさぐるということは、明末の華北民衆反乱の契機としての、華北の各地域社会に共通する矛盾を明らかにすることにもつながると考える。しかも、これまで明末清初期の社会動乱の性格は、主に、華中・華南の多くの地域社会で発生した奴変・抗租・民変をめぐって論議されてきた。[2] それ故、今新たに、このような土賊の蜂起――華北のほぼ全域で発生した土賊の蜂起を究明することは、明末清初期の社会動乱の性格を、華北・華中・華南をつらねた全中国的な規模で明らかにする一つの手がかりにもなるのではないかと思われる。この意味で、改めて土賊についての包括的な分析をする必要がある。[3] その際、従来佐藤文俊が行なってきた個別的な土賊研究の成果が、批判的に継承されねばならないであろう。[4]

① 最近発刊された小説『李自成』（一九七七年、中国青年出版社）の著者姚雪垠は、崇禎十三年冬以前、本稿でいう前期における李自成の活動（「剿兵安民」のスローガン掲示等）を重視している。筆者の見解と関連する所が多いので、今後、共通点・相違点を含めて検討していきたい。「関于《李自成》的書簡」（『文芸論叢』六、一九七九年、上

海文芸出版社、所収）等参照。

② はじめに註②、田中正俊「民変・抗租奴変」前掲等。佐伯有一「明末の董氏の変―所謂『奴変』の性格に関連して―」（東洋史研究、第一六巻・一号）等。これに対して、明末清初の華北郷村社会を扱った論文は、事実上、片岡芝子「明末清初の華北における農家経営」（社会経済史学、第二・三号）のみである。又華北の奴変についても、佐藤文俊「光山県・麻城県奴変考」（明清史論叢刊行会編『中山八郎教授頌寿記念明清史論叢』、一九七七年、所収）だけである。ただし、最近発刊された川勝守著『中国封建国家の支配構造』第二篇第六章「華北における張居正丈量と一条鞭法の普及」・第七章「一条鞭法による賦・役制度改革と郷紳的土地所有の展開」（一九八〇年、東京大学出版会）には、華北の土地所有の特質をふまえて、明末の華北の賦・役制度改革の具体的な過程、及び郷紳的土地所有の展開の特徴が述べられている。明末の華北の社会矛盾をとらえる上で参考の一つとなると思われる。

③ なお、「流賊―土賊・一般民衆」の二重構造に留意するならば、同様に広域的な一般民衆の活動の所以も考えねばならない。ただし現時点では、そうした活動は流賊集団への参加か、自ら土賊と化すか、どちらかの方向に収斂していったと考える。故に、一般民衆の活動に対する追求の必要性そのものには、本稿は言及しないことにした。

④ 佐藤は、一六四一・四二（崇禎十四・十五）年の山東兗州府西部における土賊・李青山の乱について、「華北における明朝支配体制の基礎である封建的土地所有関係をめぐっての正面からの対決」と規定し、又一六四〇―四三（崇禎十三―十六）年の河南並びに河南・安徽省境地域における土賊・袁時中の乱について、「没落しつつあった在地中小地主層による旧来の農村秩序の維持という方向を有する」と規定している。はじめに註⑧。だが佐藤は、前者の土賊の攻撃対象が多く「中小地主層」であったと言っており、二つの土賊の性格規定には、「中小地主層」の位置づけ方をめぐってくい違いが認められる。総じて佐藤の研究は、土賊の個別的な分析に留まるものであり、複数の地域の土賊を対象とした総合的な把握を試みるまでにはいたっていない。

（名古屋大学大学院生　　）